

「南さんはいつも図書館にいるわね。突然だけど問題です。「南」という字から直線を二本引くと、ある漢字になります。何でしょう?」

確かに、高校1、2年の毎日のほとんどは図書館にいた。僅かな休み時間すら、教室でひとりでいるのがいたたまれなくて、図書委員という名目のもと、図書館で委員の仕事をしてきたのだ。本は好きだ。図書館が唯一の居場所だった。

冒頭のなぞなぞは司書の方からかけられたものだ。毎日来ていれば当然顔見知りになる。白髪の交じった柔らかい笑顔のその方は、私が朝も昼も図書館にしようと、嫌な顔ひとつせずに、「いつもありがとう」と言ってくれた。

「南」から直線二本ですか……。うーん、ちょっと、すぐに分からないな。考えてみます。」
そう返して通学中や自宅で考えてみたが、どこにどう足しても、よく分からない。

数日後、私は観念して図書館で降参宣言をした。

「答え合わせよ。」

司書の方はニコニコしながら紙とペンを持ってきて、「南」の字から縦線を消した。

「あっ!」

縦線を2線引くと、「幸」という字になった。顔を上げると、いつもの柔らかい笑顔があった。
た。

「南さんの笑顔は素敵なんだから、いつも私にお話してくれるみたいに、もっと肩の力を抜いてごうよ。」

目の前の「幸」の字が涙で滲んで見えなくなった。

高校3年生。生徒会役員として、メンバーやクラスメイトとともに文化祭を楽しむ自分がいた。「南」は「幸」の字。そう教えられてからは、自分のことが少しだけ、好きになった。私の宝物はいつもそこにあったのだ。